

トマトハウス

清川 文香

季節の野菜をいろいろと作ってくれていた義父が8年前に亡くなってから、畑に草を生やしておくのも残念なので、夫は少しずつ野菜の栽培を始めた。

初めのうちはナスやキュウリなどの夏野菜の苗を3本ずつほど買ってきて植える程度だったが、そのうちに本やインターネットで調べながら、土の改良や肥料について研究を始めた。何事も理論から入る性格だ。

3年前には小型のトラクターを購入した。そうなると耕作は本格的になり、さまざまな野菜を育苗から始めるようになった。

毎年、トマトの大玉がうまく出来ない。梅雨の長雨にあうとひび割れが生じ、腐ったり変形したりする。梅雨に入る前に雨除けの屋根をかけてやるのが効果的だと聞き、今年こそはと、トマトの雨除けハウスを作ることにした。

畑のうねのサイズに合わせ、アルミのポールを使ってトマトをすっぽりと覆いかぶせる枠組みを設計した。

日曜の午後、半日かかって組み立て、全長6メートル、幅2メートル、高さ2メートル50センチの立派な柵状アーチが出来上がった。構想は完璧だった。彼の失敗はこれを自宅の庭で組み立ててしまったことだ。

夕方、「ちよつと手伝って」と私を呼ぶ。まさかと思つたがこれを二人で畑まで運ぶつもりらしい。

畑は家の裏の空き地の向こうで、直線距離にして20メートルほど

だが、テニスコートほどの広さの空き地は雑草に覆われている。柿の木も無造作に広がっているのでこの障害物をよけながら進まなくてはならない。

セーノで両端を持ちあげて庭から小道に出て塀沿いにヨタヨタと歩き、ようやく空き地の入り口にさしかかった。

重さに耐えかね、前を行く夫に「いったん休憩！」と叫ぶ。手がジンジンしびれている。

再び持ち上げてゆっくりと進む。左右16本の足があつちに引っかけ、こつちこつちにつかり、なかなか前に行けない。そうするうちに何だか笑いがこみ上げてきた。

夫婦して右だ左だと叫び、でっかい柵を運んでいる姿は、なんと滑稽な光景だろう。

お隣のご主人が、何かと裏口からのぞいて状況を理解した様子。「なんで畑で組まんのじゃあ?」「そうですよねえ」笑いの止まらない私。

「おじさんはビール飲んでできあがつるから力にならんかもしれんぞ」と言いながら出てきて、ひよいとポールを持ち上げた。

おかげで無事に柵はトマトの周りにぴったりと収まった。あとは上部にビニールを張るだけだが、過保護過ぎたのか肝心のトマトは元気がない。

作者 清川文香

山陽新聞夕刊

題名 トマトハウス

2019.08.01 掲載